

アーディ・シャンカラチャーリヤの生涯と教え

第1部

ジョエル・デュボワによる解説

シッダ・ヨーガの道の教典的基盤の一つは、ヴェーダーンタの解説者の中でも第一人者であった偉大な賢人アーディ・シャンカラチャーリヤの著作です。非二元論の一学派であるヴェーダーンタは、古代のウパニシャッドに含まれる多様な教えを統合したものです。ウパニシャッドそのものは、ヴェーダの不可欠な部分を形成しています。ヴェーダとは、もともとは火の奉納の儀式（ヤグニヤ）の際に唱えられ、何世代にもわたって独特な系譜を介して今日まで口伝で継承されてきた膨大な数の賛歌と儀式の集積です。ウパニシャッドは、そのような多くの系譜の「ヴェーダの終章」（ヴェーダーンタ）に見られる注釈的な説明や物語です。これらの文献は、マインド、知覚、自己（アートマン）の性質に関する幅広い見解を記録しています。

アーディ・シャンカラチャーリヤは本質的に、私たち一人一人は在るがままでパラマートマン、すなわちあらゆる存在の大いなる自己であると教えました。この大いなる自己は、ブラフマンとして知られる超越的な現実と同一であり、すべてのものを包含し、すべてのものの中に存在しています。私たちは自分がブラフマンと同一であるという真実を知らないがゆえに、本当は非二元のまばゆい光輝であるものの上に差異を重ね合わせ、自分の周囲に相違を見いだします。さらに、ブラフマンを達成するために何かをしなければならないという考えはすべて、私たちがすでにブラフマンであることを認識するのを妨げます。シッダ・ヨーガのグルであるグルマーイ・チッドヴィラーサーナンダ、バーバ・ムクターナンダ、バガヴァーン・ニッティヤーナンダは彼らの教えの中で、バーバの言明である「神はあなたとしてあなたの中に住んでいる」に象徴されるように、一体性のビジョンに言及しています。このアーディ・シャンカラチャーリヤのビジョンは、『ヴィヴェーカ・チュダーマニ（識別の至宝）』や『アートマ・ボーダ（自己覚醒）』などといったシッダ・ヨーガの道で学ぶ幾つかの短い詩節の論説の中に明記されています。

アーディ(最初の)という称号は、初代のシャンカラチャーリヤと、彼が始めた系譜の後の教師たちとを区別するためのものです。彼らの多くは、その系譜を導く師となった後にシャンカラチャーリヤの称号を与えられました。この最初のシャンカラチャーリヤの著作が他の人々に引用され始めた時期を分析すると、彼が生きていたのは西暦8世紀頃であることが分かります。彼の最初の弟子たちにとって、彼はほとんどの場合、単にアーチャーリヤ(伝統の師)、またはバガヴァットパーダ(祝福された神の足元にいる者)として知られていました。彼の生涯と教えについての今回のこの記述では、彼を単にシャンカラと呼んでいきます。

シャンカラの生きた時代から何世紀も後に作られた伝説や口伝によると、彼は広く旅をし、当時の偉大な学者たちを討論で打ち負かし、インド各地に学問のセンター(マタ)を設立したといわれています。恐らく彼の最も有名な伝記は『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ(シャンカラの四方の征服)』で、これは14世紀の賢人ヴィディヤーランヤ・スワームイによって書かれたと思われています。歴史学者たちは、この伝記もその他の伝記作家の主張も、うのみにしないよう忠告していますが、ヴィディヤーランヤ・スワームイのような著者たちは、シャンカラが書いたと立証できる教典に没頭し、従ってシャンカラの生涯についてのその記述は、彼のユニークな個性と教え方が強調されています。シャンカラの旅や討論の詳細を確認することはできませんが、伝記作家が描写するように、彼がヴェーダの真実をしっかりと把握し、それらの真実を疑うさまざまな批判者に対抗する緻密な議論を構築したことに疑いの余地はありません。シャンカラの生涯についての今回の概説は、彼の真正の著作に見つかる詳細と、ヴェーダータに関する最新の歴史研究に基づいていますが、同時に、従来の伝記作家たちによって提供された枠組みも利用し、彼の生涯のさまざまな出来事や物語に映し出されたシャンカラの重要な真実を強調しています。

生まれと教育

伝記作家たちによると、シャンカラは南インドのケーララ州の海岸沿いにあるカーラディで、ナンブーディリのブラーミンの家に生まれました。このブラーミンはヴェーダの忠実な伝承者であり、古代の火の奉納の儀式(ヤグニヤ)を現代まで管理してきました。ナンブーディリはまた、

ヴィシュヌをナーラーヤナ(人格としての宇宙)——最終的にシャンカラが好む神の形——として崇拝することでも知られています。

伝記作家たちが述べるに、シャンカラは幼い頃にヴェーダの勉強に夢中になりました。それは、シャンカラがわずか3歳の時に亡くなったと言われている父親の死の空白を埋めるかのようにでした。シャンカラは、伝統とされる8歳より数年前にウパナヤナ(神聖な糸)の伝授を受け、授けられたすべての神聖な音節を完全に記憶して吸収し、すぐに家族のためにヴェーダの儀式を行ったと伝えられています。確かに、シャンカラの著作全体に見られるさまざまなヴェーダの文献からの多くの引用、ヴェーダの儀式に関する完全な知識、そしてしばしば詩的な解説手法は、彼が神童であった可能性を示唆しています。

シャンカラがヴェーダの勉強を終えると——8歳という早さだったと言われる——彼はサンニヤーシンの誓いを立てました。現代のインドの都市部や欧米では、この用語は一般的に、定住して共同生活を営む僧侶を指します。しかしながら、シャンカラの時代、サンニヤーシンは儀式の義務や家族の絆を一切放棄した放浪する修行僧のことで、今日でもインドの地方の多くで見られます。『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』には、そんなにも幼い息子がこの極端な一歩を踏み出す許可を与えられない母親を、シャンカラがどのように克服したかという古典的な物語が描かれています。この物語によると、シャンカラがペーリヤール川に沐浴(もくよく)に行った時、ワニがシャンカラの足を捕えました。彼は泣きながら母親に、サンニヤーシンになることを許してくれたら、ワニは自分を放してくれるだろう、と言いました。母親は、もしその通りだったら、少なくとも生きている息子にこれからも会うことができると考えて、その願いをかなえました。ワニはすぐにシャンカラを放しました。物語が正確かどうかはともかくとして、これはシャンカラが賢人ガウダパーダを称賛して書いた詩のイメージに通ずるものです。その詩とは、死と再生を脅かす貪欲な捕食者で満ちた人生を劇的に表現しています。

彼は、すべての者が荒れ狂う危険な海に浸かっているのを見た。

そこは絶え間なく生まれるたくさんの強欲な捕食者(「つかむ者」)たちで

ひどい状態になっていた。

それらの者への慈悲により、

彼はヴェーダの深い海の中から不滅のネクターを解き放った。¹

きっかけがワニなのか、あるいは単にこのグルの力を実感したことなのか、実際にシャンカラはヴェーダの祭司者としての責任を後に残して、この詩で偉大なヴェーダの大海から抽出された洞察の「ネクター」と名付けられている解毒剤を彼に示したグルを捜し出しました。それが、シャンカラが「その太陽光線のような声が暗闇の不浄を破壊した」²者とたたえるゴーヴィンダパーダです。そして『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は、その人物は上記の詩で称賛されている他ならぬ偉大なヴェーダーンタの師ガウダパーダの弟子であると述べています。

解説を通じた教え

シャンカラは、ゴーヴィンダパーダに出会ってから極めて速く学んだので、グルからの教えをほとんど必要とせずに非常に深い洞察力を得たと、『シャンカラ・ディグ・ヴィジャヤ』は伝えています。グルはすぐにシャンカラに、聖地ヴァーラーナシ(ベナラスとしても知られる)に行き、さらにヒマラヤに向かうよう命じました。その地でシャンカラは12歳にして多くの賢人と意見を交換し、多くの解説書を書いたと伝えられています。今日まで伝えられているシャンカラの作であると立証できる著作には、10のウパニシャッドについての解説や、『シュリー・バガヴァッド・ギーター』についての解説が含まれています。彼はまた、ウパニシャッドの思想を体系化した幾つかの作品を書いています。それらはヴェーダーンタや『ブラフマ・スートラ』の解説、彼のグルのグルであるガウダパーダによるものと考えられる詩集『ガウダパーダ・カーリカー』の解説、そして『ウパデーシャサハスリー(千の教え)』として知られる詩と散文の著作集です。これらの作品を著したシャンカラの年齢がどうであれ、その独創性と思考の一貫性は、年長者からの指導をほとんど必要としない若き天才の強い信念と集中力を反映しているようです。伝記作家たちは、シャンカラの解説はすべての偉大な師に期待されるものであると記していますが、彼以前の誰かがこれほど広範囲の伝統的資料をこれほど包括的に解説しようとしたという歴史的証拠は、ほとんどありません。

シャンカラの著作は、その膨大な量——出版物にして数千ページ——から、彼の教え方のシンプルさや明快さが覆い隠されがちです。著作全体を通して、シャンカラは、真理を悟るためには生徒は聴き(シュラヴァナ)、考え(マナナ)、尊敬され信頼できる師の言葉にひたすら集中しなければならない(ニディディヤーサナ)と強調しています。³シャンカラにとって、ブラーミンの伝統全般に関しては、ヴェーダ(ヴェーダに含まれるウパニシャッドを含む)は何よりもまずシュルティ(聴くこと)であり、それらの音を聴くことが、(概念について読んだり考えたりするのではなく)、それら口伝による資料の本質であることを、彼は強調しています。ウパニシャッドには、聴き、考え、ひたすら集中する一人または複数の生徒に賢者が教えを授けるという話がよく出てきます。そしてシャンカラは、霊妙な真理を伝えるために使われる豊かな修辞表現を含んでいる幅広いウパニシャッドの物語や宣言を注意深く検証する上で、この手法を手本にしています。ヴェーダで語られている言葉を注意深く検証することに重きを置くことは、『ヴェーダーンタ・スートラ』の最初の四つの格言に明記されています。

- (1) さあ、ブラフマンを知りたいと願おう。
- (2) そこからすべてのものが生まれる、などする。[つまり、その中にすべてが存在もして、そして消滅もしている]
- (3) なぜならそれはヴェーダの源である。
- (4) そして、[すべてのヴェーダ]が共に流れることから、それ[ブラフマンは知られる]⁴

シッダ・ヨーガの道では、この学びの伝統は、冒頭で述べたように、ヴェーダーンタの教えをたびたび取り入れているシッダ・ヨーガのグルの教えを勉強し、実践し、吸収し、実行しなさいというグルマーイの指示によって守られています。

ウパニシャッドの賢人の言葉を伝える

ウッダーラカ・アールニ(ガウタマとしても知られる)とヤーグニャヴァルキヤは、『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』と『ブリハダーラニヤカ・ウパニシャッド』に最も包括的にその言葉が記録されている2人のウパニシャッドの師です。ウッダーラカにとって、自分自身を知ることが世界全体を理解するための鍵です。なぜなら、ウッダーラカが息子に与えた強力なマントラ、タット・トワム・アシ(汝(なんじ)はそれである)が示すように、すべては自分という存在から生まれている

からです。言い換えれば、目に見えるものはすべて、万物の根源であるその唯一の存在の一つの形です。それはちょうど、蜜の味がすべての花の本質であるように、大海がすべての川が融合する場であるように、樹液が木の全体に見いだされるように、その唯一の存在は知られ得るのです。⁵

賢人ヤグニャヴァルキヤは、同じ真理に対して微妙に異なるアプローチを取っており、その唯一の存在を「生まれざる大いなる自己」(ブリハトゥ・アジャ・アートマン)と表しています。この大いなる自己を説明するように迫られた時、ヤグニャヴァルキヤは、この大いなる自己とは、私たち一人一人の中の見る者だが見られることはなく、聞く者だが聞かれることはない存在であると特定しています。それは、呼吸をしているその存在です。その大いなる自己への愛から、人は他者を大切に思うのです。しかし、これ以上のことを言うように迫られた時、ヤグニャヴァルキヤはただ、ネティ・ネティと言います——英語に直訳するのが難しい簡潔な言葉。これは na iti の短縮形です。na は否定すること、iti は引用の末尾や議論を締めくくることが示す不変化詞です。従って、ネティ・ネティは、人が引用する可能性のある大いなる自己のどんな属性も、または議論する可能性のあるどんな点も、「～ではない、～ではない」と、それを特定するには及ばないことを示しています。

シャンカラは、この2人の師の相補的なアプローチを、ブラフマンとは何か、ブラフマンでないものは何かについての彼自身の解説に取り入れています。シャンカラはヤグニャヴァルキヤの表明を最高の理解と見ているようで、これは恐らく、『ブリハダーラニヤカ・ウパニシャッド』にある、ヤグニャヴァルキヤがウッダーラカ・アールニを有名な論争で論破したという事実を反映しているためです。しかしシャンカラは、ウッダーラカやウパニシャッドにその教えが記録されている他の賢人たちの名声を傷つけることは決してなく、彼らの「偉大な声明」すべての真実を真に聴き、考え、ひたすら集中し、それぞれの位置を理解することが、ブラフマンへの洞察に到達するための鍵である、と強調しています。⁶シッダ・ヨーガの道においても同様に、私たちはグルの教えを一つ一つ注意深く考察し、自分のサーダナーにおけるそれぞれの教えの位置を見定めるよう求められています。

無知と「重ね合わせ」

探究者がウパニシャッドの偉大な声明の真実をつかむのを助けるために、シャンカラは、万物の源である大いなる自己、すなわちブラフマンを知覚することを妨げているものを厳密に特定しています。この無知——アヴィディヤー（洞察力の欠如）——の根本的な原因は、シャンカラが「重ね合わせ（アディヤーサ）」と呼ぶ、一つの精神的な癖によるものです。マインドは、知覚するものに絶えず差異を重ね合わせ、実際には単一（アドヴァイタ）の、ブラフマンの光り輝く完全さのみが存在する場所に、違い（ドヴァイタ）を見るよう私たちを導きます。

この概念、つまりヴェーダーンタの教えへのシャンカラの比類ない貢献は、一見極めて抽象的に見えるかもしれませんが。しかしながら、シャンカラのブラーミンの生徒たちは、神聖な存在の概念を一般に知覚できる物に重ね合わせるといふ「専心」（ウパーサナ）の日常的な実践で、すでに重ね合わせの概念を鮮明に理解していました。ウパニシャッドの章句の多くは、呼吸（プラーナ）をブラフマンとして、太陽を神として、人の胃を食物をささげる供犠の火として、そしてヴェーダの朗唱の様相を季節の循環として見なすよう促すことで、ウパーサナを命じています。シャンカラは、マインドを浄化し、集中力を磨く手段として、そのように普通の物に注意を向けるというウパニシャッドの指示を完全に受け入れています。⁷しかし、ウッターラカやヤグニャヴァルキヤが教えるようにブラフマンを直接知ろうとする段になると、シャンカラは探究者にすべての重ね合わせを手放すよう促します——自然の側面に神聖さの概念を重ねることであっても。⁸ 重ね合わせを手放すようにというシャンカラの助言は、例えば、崇拝の終わりに、崇拝者がその純粋な体験に何も重ね合わせることなく、それをありのままに目撃するといったように、体験している安らぎの状態に心を開くことを示唆しています。

この世界の物事に対する冷静さと、すべての制限から解放されることへの切望をもってこの方法を厳格に追求する者は、この体に生きている間にブラフマン（ブラフマ・ヴィディヤー）、すなわち大いなる自己との同一性への深い洞察を得ることができ、また達成するだろうと、シャンカラは主張しています。逆説的ながら、シャンカラは、この深い洞察はいかなる種類の努力とも

無関係に生じると断言しています。しかし彼はまた、そのような洞察の達成をヴェーダの儀式の履行に例えて探究者をこのゴールへの到達に導くという、非常に実践的なこともしています。⁹ブラーミンの司祭はヤグニャのささげ物を用意しながら、ささげる神を思い浮かべ、それからこう宣言してささげ物を放ちます。「これは神のものである——私のものではない！」。同じようにして、ブラフマン、大いなる自己の体験への洞察を求める者は、ブラフマンとの同一性を宣言する一つまたは複数のウパニシャッドの声明を思い浮かべ、それから、「この体、このマインド、この感覚——それらは私のものではない！」¹⁰と自分自身に思い出させることによって、すべての制限ある重ね合わせを解き放ちます。ですから、シャンカラの解説の教えは、マインドにブラフマン以外のものを見る癖を手放させるのに十分な導きを与えています。そして、シッダ・ヨーガのグルの教えにおいては、生徒は、大いなる自己とは何か、そうでないものは何かを確認することの並列するバランスを見極めていきます。

第2部を読むにはここをクリックしてください



© 2023 SYDA Foundation. 著作権所有。

¹ *Gaudapāda Kārikā Bhāṣya*, IV.100; English translation © 2022 SYDA Foundation.

² *Upadeśasahasrī* XVII.2; English translation © 2022 SYDA Foundation.

³ This principle is based on Yājñavalkya's instructions to his wife Maitreyī in *Bṛhadāraṅkaya Upaniṣad* 2.4.5 and 4.5.6 and is adopted by most Vedānta writers.

⁴ *Brahma Sūtra Bhāṣya*, 1.1–4; English translation © 2022 SYDA Foundation.

⁵ *Chāndogya Upaniṣad*, 6.

⁶ *Brahma Sūtra Bhāṣya*, 1.4.

⁷ *Taittirīya Upaniṣad Bhāṣya*, 1.10, 2.2–3, and *Bṛhadāraṅkaya Upaniṣad Bhāṣya*, 1.1.1, 1.3.28; as interpreted in Joël Dubois, *Hidden Lives of Brahman* (New York: SUNY Press, 2015), p. 98–102.

⁸ *Brahma Sūtra Bhāṣya*, 1.1.1, 3.3.9, 4.1.5–6; as per Dubois, *Hidden Lives of Brahman*, p. 103–4.

⁹ *Bṛhadāraṅkaya Upaniṣad Bhāṣya*, 1.3, 1.4.7, 3.5 and 4.4.22; as per Dubois, *Hidden Lives of Brahman*, p. 319–40.

¹⁰ *Upadeśasahasrī* I.8, 10, 13; II.3; as per Dubois, *Hidden Lives of Brahman*, p. 340–43.